

第57回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2009年3月16日(月) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・友谷^{ともたに}知己^{ともき} 文学部准教授

発表テーマ「推理小説と演劇美学—中井英夫の場合—」

・谷^{たに}弘詞^{ひろし} システム理工学部准教授

発表テーマ「高記録密度磁気ディスクの潤滑剤電界印加ディップ塗布法の開発」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00～17:00)

① 平成20年度卒業式、大学院学位記授与式

および平成21年度入学式の挙行について [資料1](#)

② 平成21年度客員教授について [資料2](#)

③ 薬物に関する意識調査の実施について [資料3](#)

④ 河田悌一学長の中央教育審議会臨時委員(大学分科会)就任について [資料4](#)

⑤ 平成21年度第35回飛鳥史学文学講座の開講について [資料5](#)

⑥ 関大生の活躍について [資料6](#)

4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐、

友谷知己文学部准教授、谷弘詞システム理工学部准教授、

古橋勇希(学生生活課職員・サッカー部コーチ)、笠井達裕(商学部3年次生・サッカー部)、

春口亮太(商学部2年次生・映画研究部)

川原哲夫学長課長、藤本清高広報室長、木田勝也広報課長 他

5 参考資料

(1) 博物館春季企画展「菅楯彦の絵画世界と大正期職業婦人絵巻」 チラシ

(2) 「第13回関西大学先端科学技術シンポジウムポスターセッション」 資料集

(3) 竣工パンフレット

以 上

推理小説と演劇美学 —中井英夫の場合—

関西大学文学部 仏文専修 准教授 友谷知己

推理小説の大団円には、ギリシア悲劇以来の演劇テクニックが存在している。即ち、謎解きの場面における、登場人物の素性の「認知」と、筋の「どんでん返し」である（アリストテレス『詩学』）。そもそも傑作悲劇『オイディプス王』は、「認知」と「どんでん返し」を含んだ最古の推理物（犯人＝探偵）でもあった。このように推理小説と演劇は意外な共通項を持つのだが、今回の発表では、中井英夫の長篇推理『虚無への供物』（1964年）を例に、演劇美学の援用による推理小説読解の一つのケースを提示してみたい。娯楽小説であり、かつ「娯楽推理」の存在理由を批判する反推理小説『虚無への供物』を、以下に「見立て」というキーワードで読む。1) 娯楽としての見立て、2) 倫理としての見立て、そして最終的な3) 見立ての破綻、である。

1) 『虚無への供物』は「見立て犯罪」の傑作と言われる小説である。見立てとは、推理物には伝統的な手法の一つで、犯罪が何らかの参照体系（伝説、口承、童謡等）に基づいて美的かつ遊戯的に為される、という仕掛けである（横溝正史『獄門島』の俳句）。『虚無への供物』も、こうした見立てのゲーム性に満ちた作品である。素人探偵たちが披露する謎解きは、一見バラバラな状況証拠から、現象の背後に隠された秩序・システム（犯人の意図）を鮮やかに描き出し、読者に意想外な「発見」の快楽を齎そうとするのだ。以下のようなシステムが使われていた。薔薇の秩序、仏典の秩序、文学の秩序、シャンソンの秩序、等。

2) しかし『虚無への供物』の見立ては、美的遊戯でありつつ、同時に抜き差しならぬ一種の人間の衝動として存在している。これは、叔父を殺害する犯人の動機に明らかである。犯人にとって、洞爺丸での父の事故死は非人間的で醜怪な不条理だった。よって父の無意味な死を何とか「人間らしい悲劇」に仕立て上げるため、犯人は、カイン（父）とアベル（叔父）の闘争の物語を夢想し捏造した。つまり犯人は現実を神話化・芸術化しようとしたのだが、これは正に、「世界の全現象はただ美的にのみ是認されている」と宣言した『悲劇の誕生』のニーチェそのものである。虚構の美を想定せずには無目的な生を容認できぬ犯人にとって、人工の見立て美学は、単なる耽美・遊戯を越えた倫理的な要請となっているのである。

3) ところが、犯人は最終的に自家撞着に陥ることになる。自白の後犯人は、素人探偵たち（そして我々読者）を断罪し始める。我々「物見高い御見物衆」は、世界のさまざまな悲劇（他者の不幸）を享樂し、さらに、好奇心にウズウズして突飛で残酷な事件を待望する「お化け」「虚無」ではないのか。人間の悲惨を好物とする悲劇や推理小説—そして扇情的メディア—は、作り手もその愛読者もひとまとめにして、有罪宣告を受けるのだ（『虚無への供物』の反推理小説としての側面）。この犯人の呪詛は、アウグスティヌス『告白』に遡るキリスト教的演劇批判—劇場で観客は、涙を流す快楽を貪っている—と軌を一にする、痛烈な快楽主義批判だと言える。しかし、こうした悲劇の不道徳性を批判する『虚無への供物』の犯人は、同時に、美的な架空のドラマの作り手にほかならなかった。つまり『虚無への供物』とは、悲劇的原理を要請し（ニーチェ）かつ拒絶する（アウグスティヌス）という美学上の二律背反を抱えた、奇妙な自己批判の書なのである。

無責任な美学的人間・享樂的読者は、かくして断罪された。（『虚無への供物』以降、中井英夫が推理小説を書くことはなかった）。しかし、中井英夫はこの自虐的な美学批判を通して、もうひとつ別の美的快を導き出そうとしたとも考えられる。読者こそが最も罪深い犯人だ、というこの書の奇怪な結論は、推理小説というジャンルに、未聞の「どんでん返し」を与えようとする美学上の企図であったとも言えるのである。

【友谷知己 プロフィール】

1965年広島県出身。早大大学院博士課程仏文学専攻単位取得後退学。パリ第四大学文学博士。2003年より現職。専門は、ラシーヌを中心とするフランス古典劇。翻訳に、ブローデル『歴史学の野心（ブローデル歴史集成Ⅱ）』（共訳）、藤原書店、ほか。現在、『十七世紀フランスの劇作家たち』『フランス十七世紀演劇集』（中央大学出版部）、『アルディ戯曲全集』（クラシック・ガルニエ社）を準備中。

高記録密度磁気ディスクの潤滑剤電界印加ディップ塗布法の開発

システム工学部准教授 谷 弘詞

【概要】

ハードディスク装置（HDD）は現在の高度情報社会の記録媒体として重要な位置を占めている。またHDDの大容量化・高記録密度化はとどまる所を知らない。今後さらに面記録密度は1Tbit/in²に向けて、ますます増加すると考えられる。しかしながら、大容量化・高記録密度化には磁気ヘッド・磁気ディスク間の隙間（ヘッド浮上量）を狭くする必要がある。現在のHDDではヘッド浮上量が約2nm（ナノメータ：10⁻⁶mm）であり、磁気ヘッドの低浮上量化には磁気ディスクに塗布されている潤滑膜（厚さ約1.6~1.8nm）が障害となる。（図1参照）

そこで、この潤滑膜の厚みを薄くする潤滑剤の開発が行われている。一方、潤滑剤はディップ塗布と言われる磁気ディスクを潤滑剤溶液中に浸漬する方法で塗布される。我々はこのディップ塗布方法に着目した。すなわち、潤滑剤の塗布時に潤滑剤分子の熱運動を外部から電界を印加することで、磁気ディスクに塗布される潤滑膜の付着形態をコントロール可能なことを発見し、電界印加ディップ塗布（Electric Field Assisted Dip Coating）装置を開発した。（図2参照）

電界印加ディップ法では、潤滑剤溶液中で潤滑剤分子に電界を印加することで^{まじりも}毯藻状の潤滑剤分子をほぐして磁気ディスク表面に強く均一に吸着させることができる。そのため、電界印加ディップ法で潤滑剤分子の分子高さを低くすることが可能であり、磁気ヘッドの浮上量を低減することができる。具体的に、ヘッド浮上量2nmの場合で潤滑膜からの隙間を同じだけ保ってヘッドを浮上させるとすると、潤滑剤の種類を選べば浮上量を30%（0.6nm）低減でき（図3参照）、HDDの記録密度を1Tbit/in²以上に向上できる。[本研究はJST産学協同シーズイノベーション化事業（顕在化ステージ）の助成により行った]

【プロフィール】

1960年徳島県生まれ。広島大学大学院理学研究科博士課程前期を修了後、(株)日立製作所に入社、同社の小田原工場（現日立グローバルストレージテクノロジーズ）に勤務し、2008年より関西大学システム工学部准教授。専門はマイクロ・ナノトライボロジー。

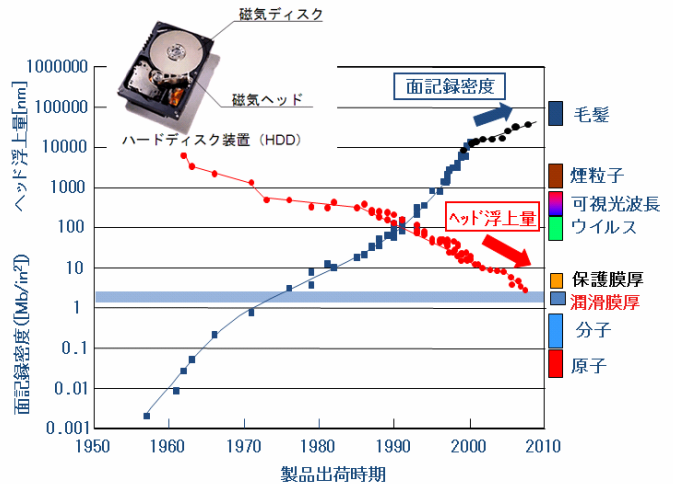


図1.磁気ディスク装置の記録密度と磁気ヘッド浮上量の推移

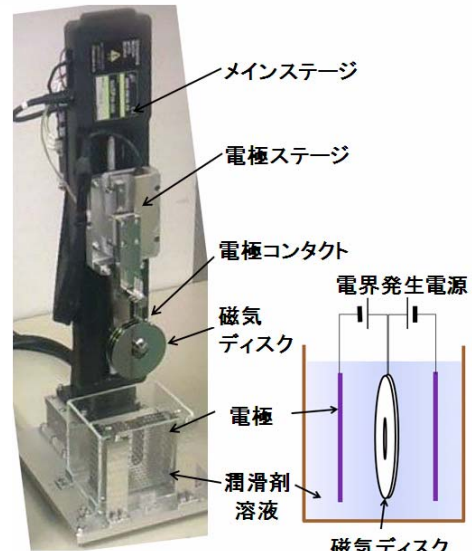


図2.電界印加ディップ塗布装置（試作機）

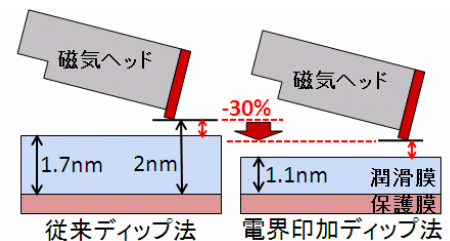


図3.電界印加ディップ法による浮上量低減